

「おふでさき」第一号の第七首から第九首は、
 かみがでてなにかいさいをとくならバ
 せかい一れつ心いさむる 七
 いちれつにはやくたすけをいそぐから
 せかいの心いさめかゝりて 八
 だんへと心いさんてくるならバ
 せかいよのなかところはんじよ 九

まず語句の意味を確認しよう。第七首の「いさむる」、第八首の「いさめかゝりて」、そして第九首の「心いさんて」はそれぞれ「勇むる」、「勇め掛りて」、「心勇んで」であり、「心が奮い立つ」「気が進む」という意味での「勇む」という動詞の活用である。「よのなか」は「よんなか」とも言い、「豊年・満作」を意味する。盛岡では「よなか」とも言うらしい。「はんじよ」は「繁盛」で、大辞泉ではその出典として明治4・5年頃に発刊された仮名垣魯文の『安愚楽鍋』という文明開化を風刺した滑稽小説があげられている。「ところ」は多義的であり、古語辞典には「場所」「部分」「その土地」「住居」「役所」とある。農作物の「豊年・満作」との対比で、『注釈』では「ところはんじょう」は「家業の繁栄」と捉えられ、他の解釈本では「ところ」は「社会」「町」とされている。したがって、この3首を直訳すれば「神が出て何彼と詳しいことを説くならば、世界の人々の心が勇む。世界中に早くたすけを急いでいるから、世界の人々の心を勇め掛けていく。だんだんと心が勇んでくるならば、世界は豊作、その場所(家・社会)は繁盛する」となる。

さて、歌のつながりに着目すると、第八首はやや挿入的にみえる。つまり、「説く」なら「勇む」(七)、「勇む」なら「豊年満作・繁盛」(九)というように第七首と第九首はともに「〇〇するならば△△」というかたちの歌であり、「勇む」を蝶番として「説く」ことがそのまま「豊年満作・繁盛」に連結される。それに対して、第八首は「勇む」ことの自律性ではなく、「勇める」(他動詞)ことの動機を示している。3首をひとまとまりとしてみると第八首の「たすけを急ぐ」という親神の情意が、第七首と第九首の「説く」→「勇む」→「豊年満作・繁盛」という連鎖を進行させているようだ。

その際注目すべきは、第八首で示された「勇める」動機には「急ぐ」という表現が付されているのに対して、第九首では「勇んでくる」経緯を「だんだんと」と表現していることである。事を「急ぐ」のであれば通常その結果を「すぐに」求めるが、ここでは「だんだんと」進行することが当然のこととして認められており、第八首と第九首のあいだに何ら葛藤のようなものは感じられない。つまり、事の進行を「急ぐ」動機と、事が「だんだんと」進行することの事実認識とが情情的に矛盾していない。このような「急ぐ」と「だんだんと」の整合性はどのように考えたらいいか。「急ぐ」や「だんだんと」とは時間の経過に関する語であるので、我々の時間意識そのものを省みることが手がかりとなろう。

我々は時間をイメージするとき、通常まず直線を思い浮かべ、その線上に「いま」「現在」という一点を据えて、それ以前を「過去」、それ以降を「未来」として捉えている。時間の直線は未来へと無限に伸びていき、その流れは不可逆であり、もう戻れない過去が消えていく。しかし社会学者の真木悠介(1937～)

は『時間の比較社会学』の中でこのような我々の時間意識は「近代」という特定の文化様式と社会構造に基づいており、普遍的ではないと指摘する。

例えば、牛時計という時間意識がある。それは「牛舎から家畜囲いへ牛をつれだす時間、搾乳の時間、成牛を牧草地へつれていく時間、山羊や羊の搾乳の時間、山羊、羊、仔牛を牧草地へつれていく時間、牛舎や家畜囲いの掃除の時間」等々の牧畜作業の一巡を基準としたもので、そこでは「時」は牛の作業という具体的な事柄を通して表象されている。したがって、例えば「30分間」という時間の表象があらゆる共同体へも通用する抽象的な尺度として機能するのに対して、牛時計は牛を生業の中心とする共同体の中でしか通用しない。ポイントは、牛時計で暮らす人々にとって時間は有限な事物や活動に結びついて表象されるために、そこでは抽象的に「無限化された未来」の観念が欠けていることである。報告されるところによると、アフリカのある部族では未来の射程はせいぜい「2～6ヶ月以内」であり、「明日」や「今年の秋」という短い未来は「現在の延長」として捉えられている。

同様に、真木は北アメリカのホビ族に関する報告を取り上げて、現在と区別されない過去について述べる。例えば「10日間」ということをいうのに英語では「ten days」と複数形を使うが、ホビ族はそうはしない。それは「10人の人たち」(複数)が来訪するのではなく「同じ一人の人」が繰り返し再訪するように、昨日や今日や明日というそれぞれの日が別の日ではなく、同じ日が10回繰り返しているという感覚を意味する。したがって、以前あったことは同じ日の再現としての「今日」に蓄積しており、過去が帰無するわけではない。つまり、『過去』とはほんとうは過去というよりも潜在する現在であり、舞台裏で待機しているもうひとつの時空に他ならないのである。

このような「もうひとつの時空」としての「現在する過去」はしばしば「神話」として表象され、我々の生と死に意味を与える。直線的な時間意識において過去が不可逆的に消えていくと考える近代人にとって神話は「非現実的」かもしれないが、それを「現在する過去」として捉える人々にとっては神話こそが「現実」を有意味に裏づける。言い換えれば、日常に経過する「俗なる時間」の流れのなかに、同一の時としての「聖なる時間」(神話)が繰り返し再訪する(現在化する)ことで、我々の生と死が有意義なものになるというわけだ。したがって、「現在する過去」とは「意味としての過去」であり、無限に延びる直線上に生きる近代人にとっては『私』の一回かぎりの生が価値を持つのにたいして、神話と共にある人にとっての生は「永遠的なものたち現われる場」として意味をもつ。

このように考えると、「だんだんと」経過する「勇む」という事態は必ずしも直線的な時間意識から捉えられるものではなく、それは「過去」の積み重ねが「未来」へ少し延長するような「現在」のあり方を示しているのかもしれない。そして、そのような「現在」を裏づけるのが「たすけを急ぐ」親神の情意と言える。さらに、その情意の実現が前近代的な共同体にとっての幸福の具体的なかたちである「豊年満作」という実りに限らず、神話が機能不全になりがちな近代社会にとっての「繁盛」であることも今日の我々にとって大変示唆に富んでいる。